

即身仏
弘智法印宥貞
曹洞宗金久山貫秀寺



曹洞宗金久山 貫秀寺

〒963-6207 福島県石川郡浅川町小貫宿ノ内63

拝観料：大人300円 中高生200円 小学生100円

お問い合わせ

※拝観される場合には、必ず事前にご連絡ください

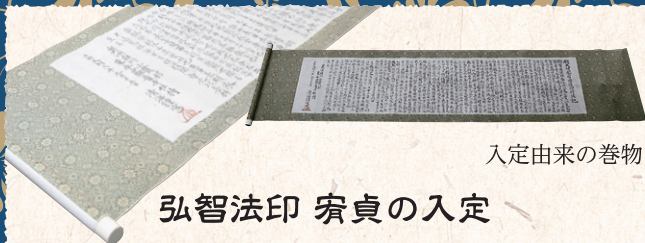
浅川町役場 企画商工課

〒963-6292 福島県石川郡浅川町大字浅川字背戸谷地112-15

TEL 0247-36-2815 FAX 0247-36-2895

e-mail:kikakusyokou@town.asakawa.fukushima.jp

URL:http://www.town.asakawa.fukushima.jp/



入定由来の巻物

弘智法印 宥貞の入定

天和3年(1683年)12月8日、宥貞は弟子の宥林に住職の地位を譲り、当時流行り病に苦しめられていた村人を集めて薬師如来の十二大願を説いたあと、斎戒沐浴(さいかいもくよく)し、以前から用意しておいた石棺に入定します。

弘智法印 宥貞の入定は、六角形の石棺の内部を丸くくり貫いた中へ入定し、一枚石の蓋の上には、薬師如来像が座しています。一般的な土中入定(どちゅうにゆうじょう)とは違い、(地上石棺内)薬師如来御身の下に入定したともいえます。この薬師如来の石像は、近くで産する福貴作石で作られており、前面には「薬師如来」の文字、後面には「権大僧都宥貞法印不生位」という文字が刻まれています。石棺下部に焼炭を敷き、その上に入定されたと伝わっています。

近隣檀家である薄井家の先祖からの言い伝えによると、弘智法印 宥貞は、入定前にカヤ、バラの実を食して、塩を断ち、鈴を持ちて入定したとあります。「三、七、二十一日後、入滅するであろう。音せずは、入定と心得、石蓋をせよ。」と遺言を残したそうです。

弘智法印 宥貞、92歳時の入定とされており、人々の尊敬と信望の厚かった弘智法印 宥貞即身仏は、現在、貫秀寺薬師堂の宝仏として安置されています。(小貫永東山観音寺は、明治22年(1889年)に小貫集落の大火災時に焼失廃寺となり、その後は再建されませんでした。)

弘智法印 宥貞即身仏と同年のものには、山形県鶴岡市の不動山本明寺に安置されている本明海上人仏があります。全国では20数体の即身仏がありますが、福島県では唯一の即身仏とされており、入定石棺、木棺及び宥貞法印行状記(天明6年(1786年)弘智法印 宥貞入定百年後に住職清海筆による入定由来の巻物)は、浅川町指定文化財となっています。



薬師如来像



入定石棺



木棺



諸国行脚では、陸奥国を廻り出羽三山である湯殿山に立ち寄ります。真言宗寺院が多くを占める湯殿山では、当時、衆生救済のため捨身成仏の風習が色濃く、この地での修行は、生涯、宥貞の衆生救済の教えに強い影響を与えたものと考えられます。

その後、出羽から北陸を巡り高野山金剛三昧院にて真言密教を修学し、小僧都の位を得ています。金剛三昧院は、鎌倉幕府を起こした源頼朝の正室、北条政子の発願により創建された菩提寺であり、金剛三昧院内にある源頼朝、源実朝の菩提を弔うための「多宝塔」は、国宝にも指定されています。高野山を下山した後は、江戸の真言宗大栄山金剛心院永代寺で研鑽を積みました。

その後、再び修練の地を求め草鞋を履き、磐城国（福島県いわき市）赤井岳常福寺、棚倉観音寺、大草の堀川観音堂に移り住み、最後の信仰の地となった小貫東永山観音寺住職となり、人々へ尊い仏の教えを説きます。そして天和三年（一六八三年）、当時この地で流行りの悪病に苦しむ人々を救済するため、一身を捧げ薬師如来の名号を唱えながら入定し即身仏となりました。



曹洞宗金久山貫秀寺

即身仏 弘智法印宥貞

弘智法印宥貞は、天正十九年（一五九一年）四月八日、出雲国（島根県）島根郡松江村の郷土、近松右衛門入道安利の長子として誕生しました。幼名を貞作といい、幼い頃から仏教の教えに心をひかれ、観音信仰の影響を受け信仰心に満ちた少年期を過ごしました。やがて成長し元服すると、出家して仏道へ進みたいと両親へ嘆願し、反対を押し切るために断食をしてまで自分の意思を貫きました。

慶長十九年（一六一四年）、二十三歳にして讃岐国（香川県）衆山松尾寺の住職宥昌和尚のもとで出家し、宥貞の名をもらい仏門修行の身となりました。そして宥貞二十七歳の時、師匠である宥昌和尚が亡くなると、ひとり諸国行脚へと旅立っていきます。



やくしどう
薬師堂



きんきゅうざんかんしゅうじ
金久山貫秀寺

金久山貫秀寺は曹洞宗として正保元年（1644年）前後に開山され、小貫東永山観音寺にほど近く、明治22年（1889年）に観音寺が焼失した後、弘智法印 宥貞即身仏を引き取り、大正14年（1925年）に即身仏をお祀りする薬師堂が建立されました。

そくしんぶつ 即身仏とは

生前から厳しい修行を積み重ねた修験者が、自らの罪や穢れを除くと共に、永遠の生命と肉体を得ることに、未来永劫に亘り、飢饉や疫病に苦しむ衆生を救うため、一身を捧げることを自身の意思によって実践するものでした。

即身仏を志した行者は、木喰行（もくじきぎょう）に入ります。五穀断ち（米、麦、粟、稗、豆）から始め、次には十穀断ちへ進み、山草、木の実だけを食して命を繋ぎながら体脂肪や水分を極限まで落として、地下に穴を掘り石室（いしむろ）を築いて断食をしながら土中入定（どちゅうにゆうじょう）します。行者は、鈴を鳴らし仏の名を唱えながら息絶えます。鈴の音が聞こえなくなると入定したとされ、三年三ヶ月後に掘り起こされ即身仏となります。真言宗では、宗祖弘法大師自身が、高野山金剛峯寺奥の院に入定し即身仏になられたと伝えられています。